

ミニマムな保障を政府に委ねるという立場をとる以上、個人が国家に支配される危険性は避けられないのでは。ある種、強制力として働くのではないか。

森村氏：共同体に依存する、国家に依存する、両者とも望ましくないとの氏の見解  
「ミニマム」の定義ははっきり決定できない

嶋津氏：森村氏コメントに加え追加説明

宮本氏：二つコメントがある。第一に、ハイエクが福祉国家の発展にもたらした「影響」を見ることも興味深いと思う。スウェーデン福祉国家の歴史では、50年代終わりに自由党などがハイエクを前面に出した福祉国家批判をおこない、その後の社民の福祉国家戦略は、福祉国家こそが選択の自由を拡大する、という観点に立ち、また福祉国家よりも福祉社会（サムヘーレット）という表現を多用するようになった。第二に、現代福祉国家批判は主要には垂直的な再分配を念頭においているようであるが、近年の福祉国家は、個人のライフサイクルをとおしての「水平的再分配」の比重が高まっている。

塩野谷氏：氏の考えるリパタリアンの福祉国家についてのコメント

自由論と両立する福祉国家論（税金＝自由を侵害する必要悪）

森村氏：塩野谷氏の説に同意

嶋津氏：塩野谷説に反論

15:10-16:30

盛山和夫 [後期ロールズの「政治的価値」と「福祉国家」]

- ・ 後期ロールズの国家論
- ・ 福祉国家のコンセプト／国家論／政治的共同体
- ・ 福祉=制度、権力的なものという側面も捉えなければならない
- ・ 「正義」という価値＝「制度の徳」
- \* ロールズ理論の「秩序問題」としての基本構図
- \* 重なり合う合意
  - 『正義論』と『Political Liberalism』の基本構図、共通性と差異
  - 契約論的な構図からの逸脱
- \* 政治的価値
- \* 社会的協働(social cooperation)が生み出す価値
- \* 福祉国家という政治的構想
  - 福祉：何らかの権力的な政治的共同体に準拠せねば現実化し得ない価値

<盛山氏発表後の討論>

鈴木氏：盛山氏の唱える制度の重要性についての質問だが、平等という理想を実現するメカニズムはありうるか？

また、パターナリズムの制度としての福祉という盛山説についての質問だが、福祉的自由という考え方は選択可能性を福祉の重要な契機としている。

リベラリズムとパターナリズムの関係性についての説明求む

盛山氏：鈴木氏の問いに対する回答

平等と強制(勉強が嫌いな子に学問の場を与えることが機会の平等か？ある種強制ではないか)の概念について  
自由という言葉の含意について  
自由、強制、権力

鈴木氏：パターナリズムは最悪のディスポティズムだという表現がある。福祉の構成要素として自由な選択の内在的意義を認めるべきではないか。

盛山氏：パターナリズムが必ずしも悪いとは思わない

小林氏：個を超えたところを見る点という基本的的方法論については共感するところが大きく、また後期ロールズにおけるリベラル・ドクトリンからの乖離を論じる点で渡辺報告との共通性を感じる。両者とも、ロールズの脱神話化・脱魔術化をしたようだ。ここまでは賛成なので、その先の議論をしたい。

契約論的基礎付けを盛山氏は疑っていると思うので、それならばそもそもロールズを用いる必要はなく、ロールズの援用が宙づりになっているように思われる。それ故、国家論の必要性という結論も根拠がなくなる。そもそも、最近是新国家

主義者が「国家の存在根拠は安全保障にある」と主張しており、その意味では戦亂的国家の復活を唱える危険が存在しているが、この論理は「福祉」を媒介として「国家＝福祉国家」を導出することになる。そこで、私は、「福祉国家」よりも「福祉公共体ないし福祉共同体」と言った方が良いと思う。その意味では、宮本氏の言及した例に近いかもしれない。

盛山氏：小林氏のコメントに対する回答

国家について、国家(中央集権的権力装置)なくして福祉は成り立つのか？

嶋津氏：前期ロールズに関するコメント

ドーキンの説

盛山氏：「自由」という言葉の独り歩きを指摘、自由という価値が何を意味するのか？

塩野谷氏：盛山論文への賞賛

『PL』のみで解釈すべきではない。『正義論』と『PL』双方を見て解釈すべき

ロールズ理論の矛盾を指摘

パーフェクショナリズムについて

ロールズの言う「reasonable」を「道理性」と日本語に訳してよいのか？

盛山氏：塩野谷氏のコメントに対し回答

後藤氏：福祉社会や中間団体に重点をおく論者が目立つ中で、盛山先生は福祉国家の必要性を主張しておられる。その論拠を記述するさいに、なぜロールズを介する必要があるのか。『制度論の構図』で展開されたように、ルール(制度、法)と個人の価値、自由との関係に関するご自身の理論をもとに論ずることが可能なのではないか。

盛山氏：後藤氏提示のルールと価値の対比に関する回答

ルールがルールとして容認されるためにはさまざまな契機を要する

ルールは価値に支えられている

嶋津氏：オーバーラッピングコンセンサスについて

渡辺氏：reasonable はさまざまな文脈で使われるが、統一的な訳語としては、「理性的」でよいと思われる。私自身『ロールズ正義論の行方』では「道理的」と訳していたが、最近ロールズ自身が reasonable を vernunft, rational を verstand に対応させているので、「理性的」でよいと考えている。それ以外の訳を当てるとなると、統一性がとれなくなるのではないか。また、オーバーラップするコンセンサスについては、それが私的自律の追求の上位におかれるかぎり（公民的）共和主義的であるが、ロールズの場合、そこまで進んでいるとは思われない。彼は、政治的活動は、他の私的な自律の追求と同じレベルに位置づけられるとしており、それに特別優位な価値を付与しているのではない。政治的価値に特別な優位がふさるのは、ロールズが公民的価値を特別視するからではなく、彼の人格の構想に実効性を与えるためである。

盛山氏：ロールズを借りて福祉国家論を展開した理由

17:00-18:20

今田高俊「リスク社会と再帰的近代：ウルリッヒ・ベックの問題提起」

- ・ 不可抗力なリスクを個々人が解決できない場合どうするか
- ・ 国家に責任をとってもらおうという立場→福祉

I. リスク社会への視点

① リスク社会への視座転換

富の生産と分配(単純な近代)からリスクの生産と分配 (再帰的近代)

② リスクの定義と類型(danger との区別)

③ リスク分配の特徴

- 1) ブーメラン効果(自業自得としての副作用)
- 2) リスクの認識の困難さ
- 3) 個人への転嫁 (失業、非典型雇用、家族の分裂)

II. 再帰的近代自己加害

① 前近代、単純な近代(産業社会)、再帰的近代 (リスク社会)

② リスク社会における連帯と政治

- 1) 不安による連帯
- 2) サブ政治

III. リスク対応的社会へ

① 経済学と市場競争におけるリスク管理

② リスク対処についてのベックの見解=常識的 (今田氏曰く、つまらない)

③ 再帰的メカニズムに準拠した処方箋の必要性

「フリーランチはない」リスク回避の王道はない

IV. 福祉国家像の見直しへ

① リスクの個人への転嫁からリスクの共同管理

「第三の道」/リスク管理としての福祉

② 福祉を基礎づける倫理・社会的原理の構築の必要性

ケアの社会的概念として位置づける必要性

<今田氏発表後の討論>

新川氏：ベックの議論はうまいところに目をつけていると思うが、問題もあるとの見解

単純な近代から再帰的な近代というような「…から」というテーゼは誤解をうむ  
のではなかろうか

階級、貧困の問題 (リスクはむしろ経済的格差が大きな要因ではないか)

ベックは近代の変化を強調しすぎている。彼の説への違和感、不満

福祉を実現するのはやはり国家ではなかろうか (共同体ではなく)

今田氏：ベックの説の弁護、ベックの説はひとつの方法論である

新川氏の質問に対し、階級的な問題、個人的な問題についてのベックの説を説明  
宮本氏：『リスク社会』のベックは環境面のリスクを強調していたが、今日のベックは失業などの社会的リスクの比重を高めて議論をしているように思う。その際、リスクはかならずしも遍在ではなく、局在へ向かっている可能性もある。また生殖医療などに関連して、この分野ではリスクコントロールが連帯の可能性を縮小する傾向もある。また、最近のベックは、ベーシックインカムあるいはパーティシペーションインカムの意義を強調していることも付け加えたい。

今田氏：宮本氏のコメントへの回答

橋木氏：リスクという点に着手したことを評価した上でのコメント

福祉国家の存在意義はリスクを考えたらうで大きくなる

家族の分裂（男女の問題）が今後最大のリスクになる

今田氏：橋木氏の提示した件は氏にとっても重要課題である

女性が社会進出し、家庭生活を営むというのは無理である。社会の責任

嶋津氏：今田氏、橋木氏の説への反論

リスクのカバーを必ずしも国がしなくてはいけないのか。

本当に女性の労働力は社会的に価値があるのかという議論（女性の労働力は競争力としてペイしないのではないか）

立岩氏：リスクを最初に持ってくる論は社会論的にリスクでは

今田氏の論は新しい議論ではない

国家による強制としての社会福祉を導き出す過程についての疑問

リスクの遍在についての論には穴があるのでは（宮本氏のコメントに追加）

ケアの倫理の必然性をリスクから持ってくることに疑問

今田氏：保険としての発想(ビジネス)とケアの倫理との違い

個人の手に負えない不可抗力なリスク管理を個人以外に誰が対処するか→国家、共同体の必要性

小林氏：ベックの論は、伝統的な福祉国家論から離れた領域、例えば環境問題との関連で重要である。「階級社会論からリスク社会論」というのは社会科学理論としては過度の単純化だが、問題提起としては重要で、むしろ福祉論としてリスク概念をすぐ用いない方がよいのではないか。私は、現在のテロ戦争問題との関連で、「ハイパー・リスク社会」という考え方を提起しようと思っている。

ただ、ベックの議論は、問題点の提示は鋭いが、処方箋はさほどでもなく、単純に「政治—民主主義」の必要性にとどまっている。今田先生が指摘されたように、エコロジーで言うような「相互依存性」を負の側（負の相互依存性）として指摘したものを見なせる。Blow back of America（チャーメーズ・ジョンソン）のように。ただ、それにもかかわらず、「個人化」にこだわっているように、近代的発想の限界が、ベック＝ギデنزにある。Reflexionは、「はねかえり」の点を重視して、

「再帰性」よりも「反照」と訳し、「反照—反省」という関連を生かした方がよいのではないか。そして、この「反省—省察」がさらに社会にフィードバックするというような全体論的な発想がここからは導かれると思う。

山脇氏：ベックの変化についてコメント

鈴木氏：リスク分配の特徴をブーメラン効果（自業自得としての副作用）に求める見方は、福祉を基礎付ける倫理や原理を展望することはむづかしいのではないか。典型的な環境的リスクである地球温暖化問題を念頭に置けば、この環境的外部性の作り手と受け手は時間的に大きく分離していて、ブーメラン効果という表現は明らかに妥当しない。むしろ問題は、世代を越えたリスク対処の社会的メカニズムを基礎付けるための公共倫理の構想に求められるべきではないか。

#### <総合討論>

山脇氏：福祉の担い手が国家か個人か

渡辺氏：リベラリズムもリバタリアニズムも、一定の社会保障を認めることでは一致しており、結局それをどのレベルまで認めるかの違いしかないように思われる。そして、その問題は論理的に答えのものであるのではなく、もっぱら経験的な考察にゆだねられるべき問題であると思われる。豊かな社会は一定レベルを高い位置におくかもしれない、そうでない場合はその逆であろう。リバタリアンは絶対的な貧困の追放が重要なのであって、相対的な不平等は問題ではないとするが、ロールズの最大の危惧は、経済力の相対的不平等が、政治権力の不平等へと通じることにある。そうしたリベラルな視点からは、不平等は絶対性においてのみならず、相対性においても重要な意味を有する。こうした懸念を取り除くために、ロールズは政治的な価値の公正な平等を保障しようとする、すなわち、政治的自由を特別扱いするわけであるが、リバタリアンは、経済力の政治権力への転嫁という問題に対してどう答えるのか。1つの解決は、かつてのノージックのように、経済力が政治権力に転嫁するチャンネルを閉ざす、すなわち、政府に対して経済的裁量の権限を認めない（徹底した不介入主義）、という方法がある。ロールズは逆に、再分配的な政策によって経済力の相対的不平等を解消する権限を政府に認めるのだが、森村先生はどうお考えなのか。

森村氏：リバタリアニズムとリベラリズムの違いを説明

渡辺氏のコメントに対し、経済的権力と政治的権力が必ずしも一致しないとのコメント

盛山氏：ロールズを読んだ後の格差原理に関する疑問

渡辺氏：ロールズは、みづからの説く「財産所有制民主主義」を、資本主義に代わるものとして提示している。そのとき、格差原理以外にも、それを実現しうる原理があるかもしれない。財産所有制民主主義における政治は明らかに共和主義的である

から、格差原理は共和主義の十分条件であろうが、それが必要条件かといえ、他の選択肢もあるかもしれない。ただ、あらゆる選択肢を考量することは不可能であるから、ロールズはさしあたり、格差原理と平均原理の対比で満足する。そして、共和主義的政治、すなわち財産所有制民主主義を実現するには、格差原理が相対優位にあることを示そうとする。

山脇氏：森村氏に国家間の格差をリバタリアンの立場からどう捉えるか質問

嶋津氏：conception of justice、organic か否かという点から正義の論証

山脇氏：EU 内の再分配の問題

渡辺氏：今田先生のいう「ケア衝動」とは、いわゆる human nature なのだろうか。今田先生は、ご自身の理論を、そうした human nature に基礎づけることで、普遍化しようとされているのか。私はそれが human nature であるとは考えない。むしろ、ケア衝動が働くためには、それ以前に、humanitarianism（人道主義）が必要なのではなかろうか。他者を我々の仲間であると認識することなしに、そしてその仲間に対して人道主義的配慮を拡張することなしに、ケアの倫理は実効性をもつであろうか。戦時下の殺戮の場面では、敵に対してケア衝動が働いているとは思えない。仲間であるという認識、すなわち人道主義的配慮がさきにあつて、はじめてケアの倫理は意味をもちうるのではないだろうか。もちろん、humanitarianism もまた、human nature ではないと考えるが。

今田氏：ケアへの衝動について説明（フロイト説を紹介しつつ。）ケア衝動→攻撃衝動（虐待例）

森村・嶋津・今田・渡辺・盛山・立岩氏：「humanitarianism vs. ケア衝動」議論白熱

山脇氏：まるで孟子と荀子の論争みたいだな・・・

嶋津氏：政治的権利、国家擁護論

国家＝ある意味普遍性を持つ

宮本氏：国家か市場か家族かという、オールオアナッシングの議論になってしまうのが分かりにくい。福祉多元主義についての評価はどうなるか？

盛山氏：役割分担のしかたを定めるのはやはり国家（法）しかないのではないか

小林氏：規範理論は重要だが、それを踏まえてさらに比較政治の分析が必要であり、この双方を架橋する必要がある。例えば、コミュニタリアンのエツィオーニは「自律と秩序」の双方のバランスが必要だとするが、これを考えるためには当該の社会についての分析・比較分析が必要になる。

宮本氏：政府、市場、家族にはそれぞれ強みと弱みがあり、それぞれの弱みを相殺し、強みを引き出すミックスという考え方もあり得る。たとえば親密な空間としての家族のメリットは、ある程度の国のサポートがなければ（介護疲れなどのなかでは）作動しない。

鈴木氏：家族は逃れようにも逃れられないアイデンティティの問題だ。コミュニティ、国



家であれば、望めば抜けられるという意味で、逃れ出る余地があるのではないか。

橋木氏：家族すら抜けられる

嶋津・今田氏：ケアと家族の関係、ケアは規範か否かについての議論

小林：社会学ではケアというものを規範理論では「正義」などと言っている。しかし、規範理論の主張する福祉の基礎や、その動機が、身近なケアの感覚にあることを認識することが大事であろう。これは、私の言うコミュニカルな「徳」に相当する。

「福祉国家と規範理論」コンファレンス

2002 年 3 月 10 日(日)

文責 那須

司会者 山脇氏挨拶

09:30-11:00

鈴木興太郎「厚生経済学の新パラダイムに基づく福祉国家システム像の再構築」

「アマルティア・センの潜在能力理論と福祉国家の経済システム」

・ 厚生経済学の新パラダイム

福祉概念の変貌 1970 年代、ロールズとセンの貢献

{ Pegou:効用

{ Sen:権利

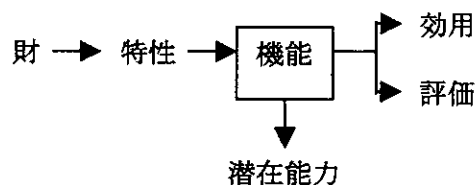
効用 vs.権利

・ システムとして福祉国家を考える (システムミックに変える必要)

福祉国家—Well-being

{ 主観主義的 approach: 効用

{ 客観主義的 approach: 財



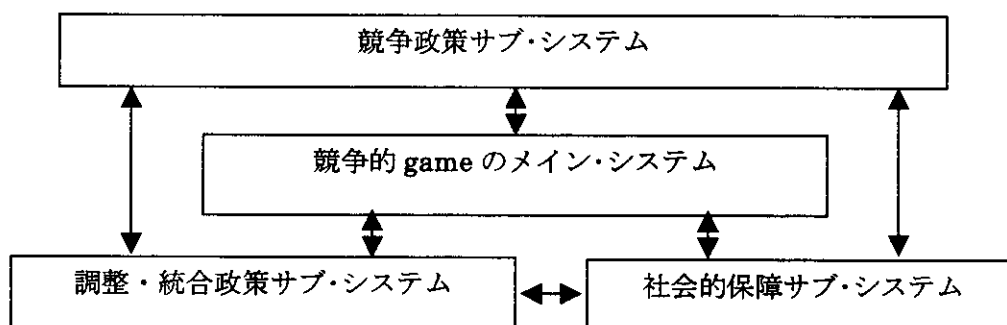
福祉=潜在能力の評価

福祉国家の経済システム

↓  
制度の経済分析

資源配分メカニズムの社会的選択 stage → 資源配分メカニズムの分権的適用 stage  
(制定 stage) (実現 stage)

福祉国家の経済システム：実現 stage



< 鈴木氏発表後の討論 >

嶋津氏：鈴木氏の挙げる評価関数に関する質問

鈴木氏：個人が自ら評価する生き方を選択して実現する自由度を<福祉>と考えるというのが、センに従って私がここで採用している基本的アプローチである。このアプローチのなかで個人の評価が果たす役割は二重である。個人が自らのどういう生き方を評価するかという先に述べた観点に加えて、社会の資源配分メカニズムはいかにあるべきかに関する彼/彼女の公共的評価という観点も重複されている。

個人の評価をどう aggregate するかがここで氏が述べている評価関数  
ルールを選択→メカニズム

盛山氏：資源配分メカニズムに関するコメント

生産の仕組みという(かつてなかった)点に着目したことを評価  
ゲームのルールという点につき質問  
資源配分メカニズムの中での潜在能力の位置づけが不明確

鈴木氏：ゲーム・フォームは資源配分メカニズムを形式的に表現する道具である。社会的選択メカニズムは、ゲーム・フォームによって形式化された競争と協調のルールを、人々が表明する公共的評価を集計して社会的に選択する仕組みである。この選択は、人々の処遇の平等性のように純粋に手続き的な衡平性の観点のみならず、資源配分メカニズムの分権的適用ステージにおいて、人々が享受する潜在能力集合の richness にも注目する点で、手続き的観点と帰結的観点の整合化に配慮している。

橋木氏：鈴木氏の手書きは達筆すぎて読めない！

センの説はぜひ実践経済学に使いたい、彼の論は後進国にしか適応できない  
との氏の意見。先進国の貧困にはいかがなものか？

鈴木氏：センの潜在能力理論は、必ずしもインドその他の開発途上国のみを分析対象にするものではない。彼自身が行うこの理論の応用は、当然彼の母国インドを念頭において行われているが、この理論の観点からアメリカや日本などにおける豊富の中での貧困の問題を分析する作業は、むしろわれわれ自身の問題だというべきである。

後藤氏：橋木氏の質問に対して。例えば、「困窮」という事実を何で捉えたらよいのか。どのようなプログラムを立てたらよいのかを現代日本の文脈で考えようとするならば、所得空間や財空間に問題を限定するのは適切ではない。はたしてどのような機能が欠如しているのか、どのような機能の回復を目標とする必要があるのかを考え、リストを作成する必要がある。公的扶助システムプロジェクトの今年度の課題にしたい。ご協力お願いいたします。

今田氏：福祉国家の経済システム:実現ステージの表についての質問、コメント  
ケアという立場から

潜在能力説と個人の責任によらないリスクとの関連について質問、コメント

鈴村氏：今田氏のコメントは重要な問題に関わっている。人々の公共的評価を公平に集計してゲーム・フォーム＝資源配分メカニズムを社会的に選択しても、そのルールに従ってプレイされたゲームが事後的にさまざまな失敗を生まないという保障はない。ケアの視点からゲームの失敗を補整する社会的工夫（セーフティ・ネット）を組み入れることは、福祉国家システムの制度化の重要な一部である。同様に、個人の責任に帰せないリスクに対処して基礎的潜在能力の保障を制度化することも、福祉国家の経済システムの重要課題の1つである。

ゲーム設定の失敗とシステムの関連について

greedy と needy をどう分けるか

今田氏：潜在能力が発揮できるという環境とはどういうものか

鈴村氏：福祉国家の経済システムは、実現した環境に応じて事後的なパッチワークを行うことを課題とするものではなく、発生しうる環境のクラスに対して普遍的に適用可能なメカニズムを設計することを課題とするものである。

小林氏：鈴村先生の話を見ると、毎回前進しているので、驚くとともに知的に興奮する。制度ステージが塩野谷理論の「正＝権利」に、実現ステージの効用関数が「善＝効用」に、評価関数が「卓越＝徳」に対応すると思うので、哲学的問題を詰めていきたい。『公共哲学』第6巻の際にはなかった点として、既存の効用関数に加え、評価関数がもう一つの柱になったことは非常に重要である。友愛経済学の場合は、効用関数に加えて、プラトンの方向から「価値関数ないし理念関数」を立てて二元論的関数の構想を提起した。鈴村先生の場合は、プラトンの形は拒否されているが、センの「合理的愚か者」批判から複眼的選好へと展開された点には、大きな類似性が存在するので、この観点から質問したい。第1は、この評価関数に関して、例えばヌスバウムはセンに対してリスト化を行うことを提唱しているが、この点についてはいかがお考えでしょうか。そのような方向ならば、価値関数の発想に、より近くなる。第2に、教育などにより効用関数が増加する場合はある。「活私開公」というように「私→公」という変化を重視する場合には、この変換メカニズムが決定的に重要なので、効用関数の時間的変化を理論化する必要があると思う。もし評価関数が「公共」的な方向に変化すれば、実現ステージの競争的ゲームにおいて、アウトカム・モラルティが向上するから、結果として（環境問題・貧困問題など）問題が減少し、社会保障サブ・システムなどにかかる負荷が少なくなると思う。第3に、制度ステージでの公共的判断について、その際の「集計」をいかにおこなうかお聞きしたい。初期ロールズのようなカント的発想の場合は、単純な集計にはならない。共和主義の場合も同様で、例えばルソーにおける「全体意思／一般意思」の区別は、単純な集計か否かという古典的な説明である。

鈴木氏：第一のヌスパウム versus センという問題は、評価関数を定義する機能空間を同設定すべきかという点を巡るものである。私はひとの福祉を理解する観点から重要な基本的機能はなにかという問題にいた日して、ヌスパウムのように先験的・固定的なリストをあらかじめ——社会を構成する人々の判断を超越して——決定する立場をとることには、非常に強い抵抗感がある。この点に関しては、私はやはり民主的合意の役割を協調するセンの立場に賛同している。第2点の教育の役割だが、ゲーム・フォームの社会的選択ステージと、選択されたゲーム・フォームと顯示された帰結に対する選好あるいは効用関数を羅針盤としてゲームがプレイされるステージをわけて考える私の立場からは、教育に期待する役割はむしろ制度設計・選択ステージにおける人々の公共的評価・判断の形成に関わっていると考える。第3の質問に対する答えも、この点と密接に関わっている。制度設計・選択ステージにおける社会的選択が再びアローの不可能性定理の罫に捕らわれないことを保証するカギは、まさに社会的選択の可能性を保証する人々の attitude であると考えている。

塩野谷氏：倫理学との関係をどうつけるか、「知識の整合化」という氏の関心に絡め、コメント

達成の理論(=徳の理論)の必要性、「卓越」を力説

効用関数に関する規制の必要性

鈴木氏：塩野谷先生が強調される徳の理論を私のフレームワークにどう位置づけるかという問題に対しては、私にはまだ自分を納得させられる答えがありません。

宮本氏：第一に、政治学的関心で、ゲームのルールを設定と修正をどう位置づけているか伺いたい。制定ステージにおけるルール設定と実現ステージのサブ・システムがおこなうルールの環視、修正との関係はどのように理解したらよいか。第二に、このモデルを福祉国家の経済システムと名づけているのは、何かポジティブな理由があるのであろうか。これに対する政治システムというのは想定されているのであろうか。

鈴木氏：私が福祉国家の経済システムという表現で意図していることは、競争のメカニズム、競争政策と産業政策の経済分析、社会保障の経済学というように、福祉国家の全体像を捕捉するうえで重要な components を、相互のインターフェイスを明示化しないままバラバラに取り扱ってきた従来の経済学を振り返って、システム的な視点を強調するためである。別の見方からすれば、政治システムと経済システムを統合した福祉国家の社会システムを構想しているのだといっても——不遜のそしりをおそれなければ——差し支えありません。

11:30-13:00

後藤玲子「福祉国家の分析視座」

- ・ 公的扶助システム
- ・ 福祉国家の分析視座
  - ✓ ドウオーキン・ロールズ・ウオルツァーの理論
  - ✓ 規範的分析の4つの分析視座
    - 後藤氏の現段階での視座（今後検討の余地あり）
      - ・ 公的補助システムを中心に説明
  - ✓ 社会保障・福祉制度の規範的性質に関する予備的分析
  - ✓ システムの一般性・普遍性・不偏性：概念的意味
  - ✓ システム設計への主体的参加と公共性
  - ✓ 個人の責任と社会的保障
  - ✓ 目的としての個人と社会的目標

#### ＜後藤氏発表後の討論＞

宮本氏：後藤報告の目的の一つは、福祉国家の規範的分析と制度比較を結合する、というにあったように思う。この趣旨に関連して伺いたい。まず、比較制度分析にかんして、今日の議論で安易に使われる傾向のある普遍主義、選別主義といったあいまいな概念についてこれをより操作可能なものとして整理し直していこうとする試みについては大いに評価したい。他方で、比較分析と価値分析、規範理論との接合という点でも、後藤氏の説を(保留つきで)評価したい。保留付きでというのは、比較分析と価値分析の接合と言った場合、いくつかの異なったアプローチがある。第一に、エスピン・アンデルセンの場合のように、自らの規範的な立場は鮮明にしたうえで、分析枠組みの客観性を担保しようとするもの。第二、ウェーバー的に、政策手段とそのよって立つ規範との関連を明示すること。第三に、公然とある規範的観点に基づいて枠組みを提示することだ。今回後藤氏が実際に行った制度分析には、やはり後藤氏の（ロールズ・センのラインに沿った）一定の規範理論立場が色濃く現れていると思うが、どのような展望をお持ちか。

後藤氏：今回提示したものは1つの予備的分析でしかない。やはり私自身の一定の立場からものであると思う。異なる複数の規範理論の立場からの分析を集める作業は、今後プロジェクトとして皆と共同体でやっていきたい。

山脇氏：規範としてセン、ロールズを持ってくることは非常にアメリカ的な考え  
欧州の規範（＝保守的な考え）を紹介、ロールズのそれとは異なる。

後藤氏：欧州の規範からすると各制度がどのように評価されるのかを具体的に提示する作業をお願いできればと思う。

橘木氏：今後のプロジェクトにマルクストは入れないのか？

鈴木氏：このプロジェクトに貢献してくれる人なら、どんなバックグラウンドでも構わないと考えている。

盛山氏：ドゥオーキンの議論についての疑問を提示

自己責任についてコメント

機会の均等化を徹底していくと能力差しか残らなくなる。はたしてそれを fare と  
いえるのか？

後藤氏：第二原理の1までだとそのような可能性のあることをロールズも指摘している。  
だからこそ、格差原理を考えた。所得格差などに関する議論を精力的に進めている  
社会学者の間ではそのあたりはどのように議論されているのか。

橋木氏：機会の平等から出発して残るのは、能力の相違のみではない。努力の重要性を強調

盛山氏：大卒エリートに関しては競争原理を入れた方がいいと考えている。全体にとっ  
てはその原理は必ずしもそうではないが。

小林氏：規範理論と経験理論との関係について、千葉大の政治哲学研究会を発足させた時  
に、政治哲学・政治思想と比較政治との協力・連係という理念を掲げた。後藤報  
告で、宮本氏が評価した第1点と第2点は密接な関係がある。ここに、かくもウ  
ォルツァーの枠組みが入ってきたのに驚き嬉しく思ったが、コミュニタリアニズ  
ムは「共同性」と同時に「文脈・地域性」を重視する思想なので、——普遍主義  
的リベラリズムとは異なって——必然的に当該地域の現実的・経験的分析を要す  
る。そして、ウォルツァーの強調するメンバーシップやカテゴリーが社会保障論  
に重要な意味を持つという点で、これは規範理論が経験分析を嚮導する好例であ  
る。しかし、ウォルツァーには限界もある。例えば、インドのカース  
ト制のように、その地域の人々が良しとしていると、それに対して外部から批判  
する論理が内在的には存在しない。だから、コミュニタリアニズムと社会保障の  
関係について執筆依頼を受けた際に、大したものがないから、自分で展開すると  
述べた。サンデルやテイラーは、私達とのハーバードでのインタビューで、「公共  
的インフラストラクチャー」の必要性を強調して方向性を示しているが、まだ具  
体的な展開はしていない。

次に、後藤さんの話を聞いていて、先ほどの2元論的関数について閃いた。友愛  
経済学を考えていたときには、プラトンの理念に基づいて理念関数を考えたが、  
技術的な限界で、フォーマリティを持たせるところまで行かなかった。その後、  
公共哲学で「公／共／私」という3元論的な枠組みを考えたので、今では3元論  
的な枠組みが適切だろうと思う。ごく大まかに言えば、「公—理念関数／私—効用  
関数」というように対応する。後藤さんは、効用関数 ( $U_i$ ) に対して評価関数  
( $V_i$ ) を示してくれたが、これは「個々人の評価」に関わる一方でヌスバウム  
の言うような共通性もある程度存在する。そこで、「効用関数 ( $U_i$ )」の対極に  
「理念関数 ( $I_i$ )」を構成し、その二つを媒介するものとして「評価関数 ( $V_i$ )」  
を考えれば、3元論的な枠組みが成立する。これによって、先に鈴木先生に質問

した効用関数の変化も定式化できるような気がする。

なお、確かにシヴィック・ヒューマニズムは参加自体を徳ととらえる場合が多いが、ルソーの場合、ポイントは参加による一般意思の形成にあるので、必ずしも参加自体の目的化を伴うとは限らず、この二つの要素は分離可能だろう。そして、ルソーの一般意思は普遍的な法＝ルールとして定立されるので、鈴木先生の言われるような制度形成に近い。私は日本政治学会で「合理的政治理論＝公共選択論」批判をしたことがあり、その際には原始論的合理性を超えた全体論的合理性を主張して、それを「新合理的政治理論」と呼んだ。センの「合理的愚か者」批判は、このような合理的選択理論批判の代表例である。その上で、ルソーの一般意思論を社会選択論的に定式化できれば、それは「新公共選択 (Neo-Public Choice) 論」ないし「新社会選択論」とでも呼ぶことが出来るものになるだろう。

14:00-

<最終討論>

鈴木氏：司会進行挨拶

Concluding remarks

山脇氏：公共哲学(public philosophy)のパラダイムについて

規範と理想の問題、現実分析と理想社会、feasibility について

アングロサクソンに偏るのではなく、EU、日本をも含めての今後の展望

官と民の interaction

今田氏：コンフェレンスからの刺激はよかった

社会保障をいかに議論の中に組み込めるか

社会保障、福祉国家と公共哲学の関係、もっと詰める必要性があるのではないか  
リスクの観点から話をしたこと、センの説により、財の再分配という従来の福祉  
の考え方から、新しい視点で福祉を考えるきっかけが生まれるという印象を受け  
た。

Capability の考えが empowerment の考えだと感じた。この議論をどう膨らませてい  
けるか。広義の意味での人的資本形成につながる議論である。

大変面白かった。

竹中氏：公共哲学研究会の本を出版予定。

公共哲学とは何か、(今出来つつある) どのような切れ味がありうるのかという観点  
から話を聞いていた。

参加して、本にしたいという思いを改めて強めた。

小林氏：公共哲学 10 巻が刊行中であり、次の第 2 段階の議論をしている。そこで、具体的  
な実践的課題を論じる実践的公共哲学としては、平和・環境・福祉が中心的な論  
点だろうと思っており、12月の地球的平和問題会議をふまえて、5月には政治  
思想学会でそのような話をする予定である。



その中でコンフェレンスに参加し、非常によいビジョンを与えられた。これで、「平和公共哲学」に続いて、「福祉公共哲学」の展望が開けた気がする。第1期では私は報告にコメントすることが中心だったが、第2期には自分自身の議論も積極的に提起していきたい。私自身のネオ・リパブリカニズムという立場においては、リベラリズムとコミュニタリアニズムとの統合を唱えているが、リバタリアニズムとは背反すると考えていた。しかし、福祉国家批判という点ではリバタリアニズムとは共通する点もあり、自然権理論と背反することが明らかになった。今後の課題としては、「福祉(welfare)」という概念自体も、幸福(happiness, well-being)から本格的に考え直す必要があるだろう。その上で、「福祉国家」ではなく、「福祉公共体(福祉共同体)」として最定式化することを主張したい。「福祉国家」は、家族や自治体を含む多様な福祉共同体の中の重要な構成要素であるが、その全てではない。さらに、福祉自体の理論を形成する必要があるだろう。ロールズの互酬性の議論は、その第1歩となりうるが、私は「一般交換」の概念により、それを発展させていきたい。最後に、「新公共選択理論」というような形で、フォーマルな理論として洗練させることが必要だろう。

渡辺氏：鈴木氏の発表に関しての質問

鈴木氏の説に関し、整理をしたい。氏のモデルをロールズの解釈ととらえてよいのか？メタルールはあるのか？など

鈴木氏：私の two-stage social choice theory は、ゲーム・フォームとしての資源配分規則の社会的選択のステージにおいて、ロールズの無知のヴェールほどには厚くないにせよ、ある種のオリジナル・ポジションの想定を用いている。また、ルールの手続き的正義を考慮する際にも、伝統的な厚生経済学のように perfect procedural justice の観点に専ら依拠するのではなく、pure procedural justice の観点にも正当な配慮をしている点でも、ロールズ的な flavour をもっている。そして、ルール制定ステージの社会的選択がアローの不可能性定理の罠に捕らわれない保障は、こうした2段階フレームワークそのものによって与えられるのではなく、可能性定理として論証の対象とされている。

那須：3日間の感想、謝意

橋木氏：初めて参加した感想

数字のないコンフェレンスは初めての体験である。

自らに刺激。

誰がどう言った、誰がどう言ったという言葉が飛び交いすぎではないか。(そういう学識がこの分野には必要なのかという疑問) 自分がどう言うか、どう思うかというのが必要なのでは。この分野の宿命なのか、気になった。

白崎氏：コンファレンスに参加することで、直接先生がたに会えたことはよかった。い

い本が出来る。

立岩氏：氏の関心・立場を含めてのコンフェレンスの感想。

氏の著書『知的所有権』とからめての感想、医療問題と含めてのコメント  
来年にまた本を出版予定

「思想」に掲載中の氏の連載について(ex.リバタリアニズムの批判、平等の問題、根拠について問うこと、効用について)

氏の主張がコンフェレンスにおいて諸先生の話聞く中でも揺らぐことはなかった。

選べるものと選べないものについて

社会的分配、平等について、今後もさらに研究したい

宮本氏：コンフェレンスは大変光栄な機会であった。今日福祉国家の問題を考える場合、福祉国家を支えてきた国際環境の変化という問題が大事だと思う。ラグーの言い方を借りれば、戦後の自由貿易体制は福祉国家体制に埋め込まれた、エンベッテドリベラリズム、埋め込まれた自由主義であったが、今日の市場はこの枠組みをはみ出している。そこでロドリクのようにグローバルな市場にふさわしい社会的なものに再び埋め込むか、あるいはローカルなシステムに市場を繋ぎ止めるかが選択肢となっている。こうしたオプションを睨んだ規範的論議が必要だと思う。自分のかかわっている福祉国家講座『シリーズ福祉国家の行方』でもこの問題を考えているが、このプロジェクトにも大いに期待したい。

森村氏：3日間で集中した議論が出来たことは刺激になった。

ジョークを交えつつ、福祉に対し批判的な氏の立場から考えを紹介。(まるで無心論者にキリスト教の教義を聞かせるようなもの・・・というコメントには皆苦笑。)  
センの説についての氏の感想、コメント

鈴木氏：森村氏のコメントに対し、回答、説明。(センについてのコメントに対し、反論+説明。開発経済学としてセンの説がつくられたわけではない)

後藤氏：「最小限」をどうとらえるか？何かで「困窮」をとらえないといけないうとすれば、何でとらえるのか？財で決めようとするとうちで決め手が無い。日本の貧困をとらえるときのメルクマールに関して、森村氏自身は何と考えるのか。

今田氏：PLI(=people's life indicator 人間生活指標) (安全安心・自由・快適の3つの次元で捉える)の紹介

立岩氏：後藤氏・今田氏のコメントについての氏の感想、主張

minimumに後藤氏がこだわるのはなぜか？そこを出発点にすべきなのか？

後藤氏：「最小限」という言葉は、社会的に合意し相互に提供しあう善に関して、「個々人の private sphere の尊重という原理のもとで可能な限りの」という意味である。具体的なリストの数やそれらの間のウエイトは、ひとびとの判断によって変わってくるし、具体的な水準は、経済的環境やひとびとの選択する労働によって高くな

りうる。

鈴木氏：立岩氏のコメントへの対応。

ルールという点

後藤氏：「自由」の概念の有効性について、討議頂きたい。

小林氏：福祉の話に対して、氏の主張／リバタリアンの立場への反論

福祉公共哲学について

global public philosophy, public action 戦争と平和

センの説、一般理論

小林氏：センには全てを「自由」で説明しようとする傾向があるが、これに対してはヌスバウムの批判が正鵠を射ている。自由にも、政治的自由・経済的自由があり、これらは衝突するし、リベラル・リパブリカン・コミュニタリアンにはそれぞれ「消極的／政治的／背積極的自由」というように多様な自由概念が存在する。従って、塩野谷先生のように、「自由概念は議論に必要がなく他の概念を用いればよい」としてもよいし、逆に、自由概念を積極的に用いながらその下位概念同士の関係を綿密に議論しても良い。いずれにしても、「自由」という概念だけでは議論は不十分になる。

先ほどからの議論を聞いていて、少し苛立った。基準形成の細かな問題以前に、世界的に貧困・飢餓問題を考えれば、「最低限の福祉」以下の人が世界中に沢山いることは自明だからである。現在、福祉の話をするためには、歴史的状況を意識する必要があると思う。そもそも先進諸国では、多くの人が最低限の暮らしは出来るようになってきたので、リバタリアンのような議論も生まれてきたのだが、現在は目を世界全体に向ける必要がある。

9月11日以降の展開は、グローバリズムが生み出した世界的な貧困問題、貧富の格差が、最重要な問題となったことを指し示している。かつて、先進諸国の中で貧困問題が深刻になり、労働運動などの抗議が生じて福祉国家が生まれたわけだが、今ではテロという形での抗議行動がなされているわけである。従って、これに対処するためには、福祉国家を超えて、福祉公共体という形で福祉の対象を世界大に拡大しなければならない。

リバタリアニズムの立場からも、最低限の福祉を認めたが、その根拠の有無はこの点で死活的な問題になると思う。リバタリアンが最低限の福祉を認める時に、先進国で考えていると、その額は相対的に小さなものと想定しているだろう。しかし、福祉概念を世界的に拡大して、世界中の「最低限の福祉」を実現しようとするれば、膨大な金額の世界的な再分配が必要になる。リバタリアンは、これを認める気があるだろうか？ もし理論的な根拠があるならば、私達は可能な範囲内でも世界中に最低限の福祉を達成しなければならない。これは、「地球的福祉(Global welfare)」ないし「地球的最低福祉(Global minimum welfare)」ということができよう。政治学では、

「シヴィル・ミニマム」という概念をかつて提起した松下圭一が既に「グローバル・シヴィル・ミニマム」という観念を提起している。

今回、「福祉国家」の代わりに「福祉公共体」という概念を提起したのは、このためである。global (glocal)public philosophy という概念を議論してきたが、福祉公共哲学も、この意味で「地球的福祉公共哲学」になる必要がある。センの概念では、鈴木先生もペーパーで指摘された public action という概念が重要だ。これは、国家の「公」ではなく、NPOやNGOなどの市民＝公共民による自発的な公共的活動を意味する。この公共的活動が「地球的公共的活動（global public action）」として世界的に発展することが必要であろう。鈴木先生の言われるとおりに、センの議論は一般理論としての意味を持っており、鈴木先生のモデルも同様だから、このように地球的・国際的に拡張することが可能だろう。しかし、受け取る側が、それを従来の国民国家の枠内で受け止めてしまうのが問題で、それを歯がゆく感じる。

鈴木氏：小林氏・橋木氏のコメントに対しての回答

センについて

福祉にとって意味のある理論を探っていきたい

なぜ哲学者が誰か思想家の口を借りるのか、橋木氏の疑問・批判に対し説明。人の説を祖述しているわけでは決していない。誰かの言及に頼るスタイルもある。

橋木氏：なぜ日本には、世界に知られる哲学者がいないのか？

山脇氏：日本の学部構成が原因と、大学の現状を痛烈に批判。

鈴木氏：京都での公共哲学学会での話を紹介

平和・環境・福祉と倫理の関係について

山脇氏：世代間倫理についてのコメント

今田氏：単純な近代と再帰的な近代という概念

平和・環境・福祉については、まだ手がつけられていない

世代間倫理については、その方向へシフトしていこう

正義の倫理に執着する段階では、平和の問題は解決しない

ケアの重要性の強調（正義＝強さ、ケア＝やさしさ）

山脇氏：和の倫理の重要性（和の脱構築）

鈴木氏：まとめのコメント

以上